

衣服・布づくりと人間の自立についての研究—インドネシア・アチェ州の事例調査

Clothes- and cloth-making and human independence:

A case study of Nangroë Aceh Darussalam in Sumatra, Indonesia

松本 由香^{*1+}, ヘラワティ・ビンティ・ムハマド・ザイン^{*2+}, 佐野 敏行^{*3+}
Yuka Matsumoto^{*1+}, Herawati binti Muhammad Zain^{*2+}, Toshiyuki Sano^{*3+}

*1 高知女子大学生生活科学部 高知県高知市永国寺町 5-15

Faculty of Human Life and Environmental Science, Kochi Women's University,
5-15 Eikokuji-Cho, Kochi, Japan

*2 Faculty of Education, Syiah Kuala University, Banda Aceh, Indonesia

*3 奈良女子大学生生活環境学部

Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University, Nara, Japan

⁺服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: This essay reports our field research activities conducted three times in FY 2010 under the main theme of the relationship between the making of clothes, cloth and related crafts and the crafting of independent and livable life ways. In this FY, we planned to understand (1) the characteristics of handicrafts and clothing styles of different ethnics; (2) the connections among the making of cloth, clothes and crafts, fashion practices, dressing-up and gender identity of women who suffered from political conflicts and tsunami disaster; (3) the ways of associating tradition, Islamic culture, and global influence with Aceh people's life. We kept multi-sited, exploratory and focused fieldwork method, and added research on people of two ethnic backgrounds: Tamiang in the north-east area and Chinese along the north coast. We also started ethnographic research on the symbolism attached to *Kopiah Meuketob*, a traditional male headwear, and the system of its production in a rural village. For data analysis, we introduced Aceh concept of *Sosial* (Social, English trans.) to deepen our discussion.

I 研究目的

本研究では、衣服づくり・布づくりが、人間にとってどのような意味をもつのか、どのような力をもつのかについて、インドネシア・スマトラ島北部のナングロ・アチェ・ダルサラーム州での衣服づくり・布づくりを事例にとりあげて考察する。平成 22 年度の研究目的は、次の 3 つである。

*1 yukamat@cc.kochi-wu.ac.jp

- ① アチェ州に住む民族(アチェ人、タミアン人、中国系住民)を対象に、それぞれの民族による服飾工芸・衣生活の特徴を明らかにする。
- ② 主にスハルト政権時代以降、2004年12月の津波までのコンフリクトや津波被害で精神的に負荷を負った人々、特に女性にとって、衣服づくり・布づくり・服飾工芸・ファッションやおしゃれが、ジェンダー観とどうかかわってどのような意味をもつのか、精神的負荷に対しプラスに働きかけるのかについて考察する。
- ③ 伝統・イスラーム・西欧の文化的要素が、アチェの人々にとってどのように位置づけられているのかについて考察する。

II 研究方法

事例調査を以下のように3回にわたり実施し、得られた資料および文献をもとに考察する。

- 第1回:平成22年5月7日～15日実施(松本・ザイン・佐野):アチェ・タミアン県でタミアン人の服飾工芸、ピディ県ガロットのアチェ人による服飾工芸・アチェ人男性用の伝統的帽子(コピア・ムクトゥブ Kopiah Meuketob)づくり、アチェ州における DEKRANAS(全国手工芸品協議会)および行政によるバティック・刺繍バッグ・ソンケット(songket 緯糸紋織)生産の推進についての調査
- 第2回:平成22年9月22日～10月3日実施(松本・ザイン):バンダ・アチェのファッション・デザイナーとそのバティック、伝統衣裳店、仕立屋、洋裁教室、DEKRANASでの衣服づくり調査
- 第3回:平成22年12月19日～30日実施(松本・ザイン・佐野):バンダ・アチェのアチェ人ファッション・デザイナー、仕立屋、中国系の人々の衣服づくり、ピディ県ガロットのコピア・ムクトゥブづくり、ピディ・ジャヤ県トレガデンのアチェ人によるティカール(棕櫚の編物)づくり、アチェ・ブサール県モンタシのアチェ人によるボルディール(ミシン刺繍)生産調査、12月22日にシャー・クアラ大学でセミナー開催(共通テーマは‘Lintas Budaya Indonesia (Aceh), Jepang dan America dalam Kehidupan Sosial Masyarakat Aceh’(「アチェの社会生活からのインドネシア(アチェ)、日本とアメリカの文化の概観」)で、‘Tradisi dan Produksi Kurume Ikat di Kyushu, Jepang Saat Ini’(「久留米緋の伝統と現在の生産」)(松本)と‘Social and Connection among Persons’(佐野)の研究報告を行った)

III 調査結果および考察

1. 民族による服飾工芸の特徴

平成22年度は、平成21年度に調査対象としたアチェ人、ガヨ人に加え、新たにタミアン人と中国系の人々について調査を行った。

(1)タミアン人の服飾工芸と衣生活の特徴

アチェ州北東部沿岸のアチェ・タミアン県、東アチェ県に居住するタミアン人は、マレー系で、マラッカ海峡を経てマレー半島と文化的つながりをもつ民族である。オーストロネシア語族に属するタミアン語を母語とし、アチェ州人口の10%ほどである。

タミアン人の服飾工芸としては、シュラム(sulam 手刺繍)、ボルディール(bordir ミシン刺繍)、ソンケットがあげられる。タミアンのシュラムは古く、インドに由来し[1]、花や葉、蔓の連続幾何学文様の刺繍に所々ミラーワークが施される[2](図1)。ミラーワークのシュラムは、現在ほとんどつくられなくなったが、アチェ・タミアン県のカラン・バルやスルワイでは、シュラムの他、ボルディールが盛んである。植物の抽象文様や伝統家屋の彫刻文様、小さな鋸歯文が、タミアンの特徴あるボルディールの文様として、ミシンで刺繍されている。ソンケット織は、古くからタミアン人の間で行われていたが、アチェ・タミアン県の DEKRANAS

が、2008年からスルワイでソンケット織の教室を開き、地域の女性たちの生活支援とソンケット織振興をはかっている。

タミアン人の婚礼や公の儀礼時の伝統服飾は、男女とも立襟・長袖・丈長の上衣と、男性はズボン、女性はカイン(腰布)で、素材はすべて手織りのソンケットである。



図1 タミアンのシュラム

Fig.1 Sulam textile of Tamiang

(2)中国系の人々の服飾工芸と衣生活の特徴

アチェ州に住む中国系の人々は主に客家人、広東人、海南人からなり、古くから居住する者というより、歴史的な出来事の影響から移動・再移動したり新たに渡来したりして、二世・三世の成人も少なくない。植民地時代以前、この地域の交易パターンは互いにより共生的な関係で、中国系商人やインド系、アラビア系、アフリカ系と結びついたことが見直されている[3]。後に述べるように北スマトラ北岸の港町シグリの人々の多くが、現在、インドネシアにおいて中国系住民のように商業にたけていて各地にちらばり商業活動(とくにテイラー)にたずさわってきたことを考慮すると、植民地時代以前の中国人のもつ商業慣行や精神が地元伝わった可能性を否定することができない。

現在、中国系住民は、バンダ・アチェのプナユン地区をはじめ、北部沿岸地域のシグリ、ビルーン、ロスマウェなどの都市に集住する。人口は統計資料がなく明らかではないが、2004年の津波で多くが亡くなったり、北スマトラの大都市メダンなどに避難して、中国系住民の人口は減少したといわれている。彼らの信仰は、土俗的宗教に儒教、道教、仏教が混雑したもので、キリスト教に改宗した人もいる。アチェ人などのマレー系の住民との混血はほとんどみられず、インタビューした15人のうち、アチェ人を配偶者としていた中国系は1人であった。プナユンに住む中国系住民のほとんどが野菜・菓子類などの食料品を販売し、また薬屋や仕立屋を営む人もいる。バンダ・アチェでインタビューした2人の中国系の仕立屋(taylor タイロール)は、メダンで定評のある中国系のタイロールの先生に師事して洋裁を学んだという。

中国系住民の衣生活について、アチェ人やタミアン人、ガヨ人のような伝統服飾はなく、婚礼で新郎新婦はタキシードとウェディング・ドレスを着用するといひ、中国の文化的アイデンティティを表象する衣服はないといえる。シグリでインタビューした、アチェ人を妻にもつ中国系男性は、結婚を機に仏教からイスラーム教に改宗したといひ、中国系とアチェ人との婚礼では、アチェ人の伝統服飾を着用するという。ジャワ島などのペラナカン(中国系とジャワ人などの土着の人々との混血)女性が着けるクバヤとバティック(臍纈染)のカインなどの衣服をもっていると答えた中国系の人はいなかった。

バンダ・アチェ市内に1990年代まで点在していた中国系住民の墓が、2000年代に入って、市内整備のため、アチェ・ブサール県の山中に移されたことに象徴されるように、衣生活をみると、アチェ社会から遊離されながら、土着の人々と共生する中国系の人々の社会的状況をみてとることができる。

アチェに住む中国系住民の生活文化についての先行研究がほとんどないことから、今後、アチェ人をはじめとする土着の人々の生活文化と比較し、またかかわり方について考察をすすめていきたい。

2. 衣服づくり・布づくりにみる自立とソーシャル

コンフリクト犠牲者や津波被災者の女性にとって、布づくり、衣服づくりは生活の糧になり、楽しみ、生き甲斐となったことが、インタビュー調査から明らかである。1986年～1993年に在任した前アチェ州知事イ

ブラヒム・ハサン(Ibrahim Hasan 1935-2007)の夫人、シティ・マルヤム(Siti Maryam 1940-)は、アチェの住民と政府軍とのコンフリクトが激しさを増した1990年代[4]をふり返し、「当時、コンフリクトは大変だった。夫を亡くした犠牲者、未亡人を調査した。彼女らは子どもを養って生活しなければならず、ボルディール・織りをずっと続けられるようにした」と語った。またバンダ・アチェのファッション・デザイナー、チュット・ズニカ・ズルカルナイン(Cut Zunyka Zilkarnain 1978-)は、津波で店を失ってから仕事を再開するまでについて、「津波で多くの人々が亡くなり、つらい思いをして起き上がれない気がした。しかしデザインすることで勇気をもつことができた。インドネシアのNGOのメルシー・コープは、私がつくったアクセサリーを見て援助してくれ、私は再起できた。メルシー・コープのおかげで、私は心を大変楽しく保つことができた」と語った。津波後、社会的に活躍した女性を讃える賞がアチェ州に設けられ、彼女は、デザインの仕事が評価されて、2006年の受賞者となった。布づくり、衣服づくりは彼女にとって楽しみであり、被災後の彼女に自立をもたらしたといえる。

各州・各県に設けられているDEKRANASは、女性がたずさわる手工芸の振興をはかり、女性の自立を扶助する、女性によるボランティア組織である。その長を務めたシティ・マルヤムは、当時、アチェ各地を、手工芸を振興するために調べて歩いた経験について、「私はあちこち地方に行くことができて、大変幸せに感じた。調査することで人々が求めているものを知ることができた。この時が、おそらく私の人生の中で最も楽しい時期だったと思う」と語った。またシティ・マルヤムと同時期にアチェ・ブサール県知事夫人を務め、彼女とともに各地の染織を調査して歩き、手工芸振興に努めたヘラワティ・ビンティ・ムハマド・ザイン(1948-)は、「自分にとって手工芸は趣味であり、それを発展させることは楽しみだった」といい、彼女自身、衣服や刺繍・パティックなどをデザインしてつくることにたずさわってきた。こうした地域の人々とかかわって行う「ソウシャル」(インドネシア語でsosial)な活動について、DEKRANASでセクレタリーを務めるネティ・ムハルニ・ムルプ(Netty Muharni Murp 1966-)は、「私たちは、(DEKRANASの一員であることで)直接社会と関われる。ネットワークがあり、援助できて楽しい。もし一人なら社会に多く援助することができないが、DEKRANASに参加していることで援助することができる」と、ボランティア・ワークで社会と関わる楽しみについて語った。インドネシア社会には相互扶助(gotong royong)の考え方が基本にあり、アチェの場合、女性によるソウシャルな活動によって女性の自立をはかる媒介に、衣服づくり・布づくりがあるといえるのではないだろうか。またソウシャルな活動をする女性自身も、活動が楽しみ、生き甲斐となって、自らの自立をはかっていると考えられる。デザイナーとテイラーの都会のファッションにおける役割を、Grabski(2009)[5]は、アフリカのセネガルを対象に視覚文化研究的に行っているが、本研究では、彼らによる衣服づくりをソウシャルの視点から探ることを目指していきたい。

3. イスラーム・ファッション・伝統の位置づけ

バンダ・アチェに住むファッション・デザイナー8人、伝統衣裳店経営者1人、2つの洋裁学校と大学で洋裁教育にたずさわる教員4人、大学生3人とデパートの衣料品店店員2人へのインタビュー調査結果から考察を述べる。

概してアチェの女性はおしゃれ好きで、明るいカラフルな色調、ビーズ刺繍などで派手に感じられるデザインが好きである。2004年の津波以後、復興支援によって生活の質が向上したことにより、洋裁への関心の高まりとともに、服飾デザインへの人々の関心は非常に高くなったといえる。2003年から施行されているシャリア・イスラーム(Syariat Islam イスラーム慣習法)による、公の場での、顔と手掌以外を覆うゆったりしたブサナ・ムスリマ(Busana Muslima ムスリム女性向けの衣服)着用の義務は、デザイナーたちにとって

デザイン上の制約にはならないという。シャリア・イスラームはファッションに対して寛容であり、人は清潔で美しくあるべきであるとしている。これを受けてデザイナーたちは、西欧のファッションというよりも、ジャカルタや国のトレンドを意識しながら、アチェの人々が好む、アチェの伝統文化をとり入れた服飾を工夫してデザインしている。ジャカルタで流行している長袖のゆったりしたカフタン・スタイルは、アチェでも人気であるが、ジャカルタのシックなミニマリズムは、アチェの人々の嗜好には合致しないようである。アチェの女性たちは、自らの嗜好にしたがって主体的にデザインを取捨選択し、衣生活にとりいれている。近年、インドネシア国内で、女性用の頭布ジルバブ(jilbab)が、かわいらしさを表現するアイテムとしてトレンドになっているという。こうしたブサナ・ムスリマが注目される中で、若年女性の中には、ブサナ・ムスリマの着用に抵抗を感じ、衣服は個人的なもので何を着るかは自由であるべきであると考える人もいる。インタビューしたデパート店員の女性は、ぴったりしたシャツに細身のジーンズを着用し、グローバルで制約のないファッションを楽しみたいと語った(図2)。一方、教育学部で被服学を専攻する女子大生は、両親の宗教教育が個人の服装観を形成し、きちんとした宗教教育を受けることで、シャリアに従う衣生活が理解できるという。このようにアチェの女性たちのおしゃれ観、ファッション観は、個人によって多様で幅があるといえる。

アチェ人の婚礼衣裳の調査から、服飾デザインが、イスラーム・ファッション・伝統の間にボーダーを設けている例をみることができる。男性服について、金糸刺繍を施した黒の立襟・長袖の上衣とズボン、婚礼披露宴の新郎の伝統服飾である。白やベージュなどの薄い色に金糸刺繍を施した上衣とズボンは、モスクでの婚礼儀式の衣裳として着用され、インドネシア全域で共通のナショナルな儀礼衣裳に近いものである。毎週金曜日のモスクでの礼拝の衣服には、ナショナルな儀礼衣裳のデザインを踏襲しながら、袖口にカフスをつけたシャツ型式のデザインがあり、これはカフスによってカジュアル化されたデザインであるといえる。また婚礼披露宴の新婦は、ビロードに金糸刺繍を施した立襟の上衣に、ゆったりした脚衣シルー(siluwue)を着け、披露宴に先立つモスクでの婚礼儀式には、ナショナルな儀礼衣裳であるクバヤとバティックのカインを着ける。このような男女の衣服の着分けをみると、婚礼儀式:披露宴=ナショナル:アチェ=イスラーム:伝統の対比的位置づけが、服飾デザインによって行われていると考えられる。

一方、デザイナーへのインタビューからは、イスラームと伝統は対比的関係にあるのではなく、アチェの伝統文化=イスラームであるという。またファッションについて、インドネシア独自のファッション・トレンドの存在、信仰にかかわるファッション・アイテム消費の浸透などから、アチェの人々にとって、ファッションは伝統・イスラームと対立するものではなく、迎合するものにとらえられているといえる。

ジャカルタなどの都市でのムスリム・ファッション興隆についての Jones(2010)[6]らの先行研究を参考にしながら、イスラーム・ファッション・伝統の位置づけについては、さらに資料を収集し、検討することが必要である。



図2 ファッションブルなデパート店員

Fig.2 Fashionable shop clerks

4. アチェ人男性用の帽子コピア・ムクトゥブに関する伝統性・象徴性と産地ガロットの持続的生産性

アチェにおける街や村の日常空間にみられる視覚文化的特徴で顕著なのは、点在するモスク(アチェではメスジッドと呼ばれる)の頭部であり、形状や色彩が多様で、外貌に一つ一つ個性がある。現在、地

方の各地のモスクは修復・修繕・再建されているものが少なくなく、この事実はモスク自体が宗教施設として厳然に在るといふ先入観を覆し、また、それぞれのモスクが地域住民の熱意によって作られる事実は、街道沿いの工事中のモスクのために街道の中央線に沿って立って通行する車から寄付を募ることで確かめられる。この点は宗教の見直しの興隆[7]で興味深いがここでは扱わない。外貌の多様性は作者たちの創意が許されることが示され、人々の自らの外貌についての創意も同様に許され、むしろ期待されることを暗示している。宗教的信心深さとファッション性との結びつき方は女性の被りもので最近よく議論されている[6・8]。それ以外の日常生活上の側面にも議論を拡大できると思われる。

外貌の多様性の中でも特異な存在となっているのが、バンダ・アチェ中心から南西へ伸びるトゥク・ウマル(Teuku Umar)大通りを2キロ程行ったところのモスク、バイトゥル・ムシャハダ(Mesjid Baitul Musyahadah、通称 Mesjid Kopiah Meuketob) (図 3) であり、その頭部にコピア・ムクトゥブが使われていることから、このモスクのもつ個性はイスラームの信仰にも負けない意味合いを放っている。

イスラーム圏の衣生活において、マレーシアの君主(サルタン)の被りものが、その王宮のシンボルとしての役割を果たす[9]のと類似して、アチェ人にとってアチェの独自性を表す象徴的なモノとして男性用の帽子コピア・ムクトゥブがあると考えられている(図 4)。イスラーム文化における人間の頭部に対する、また、それに載せる被りものに対する強い関心と、モスクの頭部のデザインに作り手の創意が活かせることが重なった結果として、トゥク・ウマル通りのモスクがあると考えられる。事務室に残されている模型から当時の計画を推定すると、コピア・ムクトゥブの頭部のデザインがあり、それは実現された。さらに、モスクを囲む塀の要所にある門の上部には予定されていなかった小型のコピア・ムクトゥブが実際に一つずつ備えられ、人々を迎える意味をもたされることになった。しかし、敷地内に住民サービスのための各種施設の建設はまったく実現されなかったことがわかる。もともと小さなモスクだったのを拡大する計画段階で、こうしたデザインになったのは、1993年の改修当時のアチェ州知事シャムスディン・マフムドゥ(Syamsuddin Mahmud 1935-、在任期間 1993-2003)が頭部をコピア・ムクトゥブの帽子の形にすることを希望したためだったといわれている。この希望は、トゥク・ウマル大通りの由来となったアチェの英雄トゥク・ウマル(1854-1899)と縁の深いこの帽子をこの大通りに相応しい視覚文化の一つとして用いようとする意図がうかがわれる。



図 3 帽子の屋根のモスク

Fig.3 Mesjid Kopiah Meuketob



図 4 コピア・ムクトゥブ

Fig.4 Kopiah Meuketob

トゥク・ウマルは、オランダによる統治に抵抗してアチェの自立的存在を確保した人物としてアチェにおける歴史的英雄の一人である(ちなみに女性のヒロインも存在する)。彼とコピア・ムクトゥブとの結びつきは、彼がこの帽子を被りながら軍の指揮をしたことにある。部下たちもこの帽子を被っていた。古い写真資

料^{*4}によると、彼の出身地ムラボー（北部スマトラの南岸の都市）の郊外にある彼の墓自体がコピア・ムクトゥブの形をしていて、この帽子が彼の存在と偉業の意味合いを付されていることがわかる。

北部スマトラ南岸のムラボーから北岸に向かう場合、海岸沿いにバンダ・アチェを通る以外に、比較的険しくない山間部を通過して北岸に行くルートがあり、北岸の港町シグリを擁するピディ県につながっている。ピディ県とその周囲は歴史的にも王国の存在があり、政治経済的な意味合いが深く、津波の被害を受ける以前、アチェの独立を標榜する政治軍事組織 GAM の指導者の出身地であり、この人物が地域の指導者の家系を背景にもつことから、拠点の一つとしてみなされたためか政府軍の標的になり、数十キロ内陸に設けられた大学は破壊され、平和を取り戻した現在でも廃墟のままで、それでも簡易屋根のもとで学生たちは授業を受けている。この大学からシグリに向かう途中、海岸から 12 キロ程の内陸に、川沿いの市場町の近傍にデサ(Desa 村)が川沿いに連なり、その一つが、今回の調査地となったガロット(Garot)であり、コピア・ムクトゥブの帽子の代々にわたる生産者女性たちが生活している。この近傍まで川沿いに平野が展開していて水田耕作地帯であり、女性たちも年2回の田植えに5～8名のまとまりで、自分の家の水田だけでなく相互扶助的に近隣の水田の作業を手伝っている。そうした農作業の合間に、男性用の帽子が、女性たちだけで代々作られてきた。この持続性のメカニズムは他の工芸品の生産の在り方に洞察を与える可能性があることから、深く探究する必要がある。

コピア・ムクトゥブは、現在、婚礼時に男性がモスクでの儀礼を経たのち、デサの婚礼儀礼に向かう前に、モスクでの盛装からアチェ独自の盛装に着替えるときに被らなければならず、すべてのアチェ人男性が婚姻時のアイテムとして身につけるものである。婚礼時に男女ともに地元の王族の衣装を平民が身につけることは、王族の権威にあやかる東南アジア一帯でよくみられる慣行であるように、アチェの偉人・英雄にあやかることが許されていると理解できるだろう。こうした用いられ方が今でも守られているとすると、コピア・ムクトゥブは作り続けられるべき工芸品であり、実際にガロットで作られてきた。消えずに残ることは現代日本においても手作り品の見直しと手作りすることの趣味的評価から復活・再生がみられる。しかし、コピア・ムクトゥブの手作りの事例は、作り手が、イスラームの教えにある 99 のアッラーの呼び名、アスマウル・フスナ(Asmaul Husna)を唱えながら、99 の部分を組み立てて仕上げると話していることから考えると、布を使ってモノを作り出すことが持続的に行われていることの仕組みを、地元の経済的自立、帽子のもつ自立精神の守護、作り手同士のソーシャルな結びつき方などと関連づけて、理解する必要がある。

IV まとめおよび今後の調査計画

平成 22 年度のフィールド調査で得た研究成果は、各項別に次のようにまとめられる。それぞれの項目で、今年度の研究成果のまとめをふまえた平成 23 年度のフィールド調査計画を述べる。

- ① 民族による服飾工芸の特徴について、タミアン人の服飾では、マレー系の文化的特徴をもつボルデイル、シュラムが特徴的であり、儀礼時の伝統服飾についても、ソケットを素材にしたマレー系の様式である。中国系の人々は、中国文化を表象する服飾をもたず、彼らがかかわる服飾工芸は、洋服の仕立てのみであるといえる。平成 23 年度は、未調査であるアラス人（東南アチェ県クタチャネ）とアヌク・ジャマー人（南アチェ県タパクトゥアン）の服飾工芸と衣生活についてフィールド調査を行いたい。
- ② 衣服づくり・布づくりは、コンフリクト犠牲者や津波被災者の女性にとって、生活の糧となり、楽しみ、生

^{*4} チュット・ニャック・ディエン博物館(Museum Cut Nyak Dhien)に展示されている 20 世紀初めの写真資料による。

き甲斐となって、彼女らに自立をもたらしたことが明らかである。また衣服づくり・布づくり支援のソーシャルな活動をする女性たちにとっても、活動が楽しみであり生き甲斐となって、自らの自立を達成していると考えられる。平成 23 年度は、さらにインタビュー調査を行い、また手工芸生産のしかた、プッティング・アウト・システム(アチェでシステム・パダン(インドネシア語で Sistem Padang)とよばれる)についてと、服飾・手工芸デザインの振興過程(DEKRANAS の活動)調査を行う。

③ イスラーム・ファッション・伝統の位置づけについては、アチェの人々、特に女性にとって、イスラームとファッションは相対するものではなく、またイスラームとアチェの伝統文化は一体となったものである。平成 23 年度は、未調査の洋裁教室の経営者とファッション・デザイナーへのインタビュー調査、また大学で教育する衣服原型の種類についての調査を行いたい。

④ ピディ県ガロット村で女性によって生産されている男性用帽子コピア・ムクトゥブは、アチェ人の象徴的存在であり、つくり方、形、文様、色はイスラームと強く結びつく。アチェ王国時代、オランダ戦争時代、GAM のコンフリクトの時代と象徴的に結びつき、アチェ人の誇り、勇気を表象するシンボリック的存在である。平成 23 年度は、この帽子をめぐる精神性、政治経済性、地域性、歴史性、デザイン性などの複合的観点からの調査研究をさらにすすめていきたい。なお本年度調査研究にご協力いただきました 2009 年度共同研究者シャフウィナ(Syafwina)氏に、深くお礼申し上げます。

文献

1. Leigh, Barbara: *Hands of Time: The Crafts of Aceh (Tangan-Tangan Trampil: Seni Kerajinan Aceh)*: Penerbit Djambatan (1989)
2. DEKRANAS Kabupaten Aceh Tamiang: *Kabupaten Aceh Tamiang Motif Tradisional* (2008)
3. Duara, Prasenjit: Asia Redux: Conceptualization a Region for Our Times, *The Journal of Asian Studies* Vol.69, No.4, pp.963-983 (2010)
4. Aspinall, Edward: Violence and Identity Formation in Aceh under Indonesian Rule, *Verandah of Violence: The Background to the Aceh Problem*, Reid, Anthony (ed.): Singapore University Press, pp.149-176 (2006)
5. Grabski, Joanna: Making Fashion in the City: A Case Study of Tailors and Designers in Dakar, Senegal, *Fashion Theory*, Vol.13, Issue 2, pp.215-242 (2009)
6. Jones, Carla: Materializing Piety: Gendered Anxieties about Faithful Consumption in Contemporary Urban Indonesia, *American Ethnologist*, Vol.37, no.4, pp.617-637 (2010)
7. Hefner, Robert W.: Religious Resurgence in Contemporary Asia: Southeast Asian Perspectives on Capitalism, the State, and the New Piety, *The Journal of Asian Studies*, Vol.69, No.4, pp.1031-1047 (2010)
8. Smith-Hefner, Nancy J.: Javanese Women and the Vail in Post-Soeharto Indonesia, *The Journal of Asian Studies*, Vol.66, No.2, pp.389-420 (2007)
9. Maxwell, Robyn: *Textiles of Southeast Asia, Tradition, Trade and Transformation*, New York: Oxford University Press, p.309 (1990)